

神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による
大澤壽人スペクタクルⅠ
ホームソングからピアノ協奏曲まで

HISATO
OSAWA

2009年12月16日(水)兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール
開演／19時(開場／18時15分)ロビー展示あり

神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」から選りすぐりの声楽曲とピアノ曲を紹介

大澤壽人スペクタクル I

ホームソングからピアノ協奏曲まで

Contents

目次

ご挨拶

大澤資料プロジェクト	P. 2
大澤 壽文・本庄 徳子	P. 3
岡田 晴美	P. 4

大澤壽人先生略歴	P. 5
----------	------

神戸女学院所蔵資料 「大澤壽人遺作コレクション」	P. 6
-----------------------------	------

プログラム	P. 7
-------	------

出演者プロフィール	P. 9
-----------	------

プログラム・ノート	P. 11
-----------	-------

「煌きの軌跡、確かなる原点」 生島 美紀子	
-----------------------	--



演奏会に寄せて

本日はお寒いなか、神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による〈大澤壽人スペクタクルⅠ〉にお運びいただきまして、心よりお礼申し上げます。

大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)先生は戦前に、留学先のボストンとパリで作曲家兼指揮者として頭角を現され、瞬く間に世界楽壇へ駆けのぼり、帰国後は神戸女学院音楽学部で教鞭をとられながら精力的に創作活動を続けられました。

先生の遺された素晴らしい質と量の資料群は、2006年8月、奇しくも先生の生誕100年にあたるその月に、ご子息大澤壽文氏から神戸女学院に寄贈されました。そして、当時の図書館長・史料室長、濱下昌宏教授を中心とする委員会において「大澤壽人遺作コレクション」と命名され、学院の宝となっています。

大澤資料プロジェクトは、先生の自筆楽譜などを中心とするすべての資料の調査と目録編纂にあたって参りました。私達の詳細な調査を集成した『煌きの軌跡—大澤壽人作品資料目録—』は、音楽学部同窓会クラブファンタジー(会長:岡田晴美神戸女学院大学名誉教授)の全額助成によって刊行され、これによって大澤先生の旺盛な創作活動の全貌を伝えたとして、神戸女学院は2008年度音楽クリティック・クラブ特別賞を受賞致しました。

目録編纂の過程では、様々な事実が明らかになりました。——作曲・編曲作品を合わせた作品数総が寄贈前に知られていた10倍以上あること、現在CDリリースされている交響曲や協奏曲の他にも多くの優れた作品があり、先生の作品世界が輝くばかりであること——これらが分かってくるにつれ、私達はこの類のない資料を扱わせて頂く責任の重さを痛感し、同時に先生の音楽の素晴らしさを広く伝えていきたいと思うようになりました。

〈大澤壽人スペクタクルⅠ〉、そして来年3月3日の〈大澤壽人スペクタクルⅡ〉は、そのような意図で企画しました。本日の自主公演に加えて、〈スペクタクルⅡ〉はザ・フェニックスホールのエヴォリューション・シリーズに採用されて、共催となります。

2回のセット公演では、先生の知られざる作品をご紹介します。日本初演や戦後初演・蘇演など、次々に登場する作品を聴いて頂ければ、戦前から戦後の日本に世界に通じるレベルの作曲家がいた事、そして作品が多種のジャンルにわたって煌いている事に驚かれると確信しています。日本が誇る作曲家の世界を、まずは今宵〈スペクタクルⅠ〉からお楽しみ下さい。

最後に朗報がございます。カワイ出版のご協力を得て、神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による『大澤壽人ピアノ曲集』が出来上がり、先生の没後56年以上を経て本日刊行の運びとなりました。ロビーで是非手に取ってご覧下さい。

大澤資料プロジェクト 生島 美紀子(代表)

増永 智子・松川 峰子・高野 雅子・清水 裕子・田中 聖子

ごあいさつ

本日は主催の大澤プロジェクト、後援のクラブファンタジーをはじめ、関係者各位の大変なるご熱意で、神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による〈大澤壽人スペクタクル I〉を開催していただくことになり、心から感謝いたしております。

父が神戸女学院音楽学部の教授をしておりました時私達はまだ小学生でしたが、毎年卒業生の方々を自宅にお招きして食事会を催すなど、神戸女学院をこよなく愛しておりました。その父の作品がこの「神戸女学院小ホール」で演奏されますことや、神戸女学院創立75周年記念歌やボストン大学音楽学部卒業作品、さらに作曲を手掛けておりました朝日放送ラジオ番組「ABCホームソング」作品など、思い出多い作品を本日のプログラムに取り上げていただくことなど、感慨もひとしおでございます。

師走のお忙しい中ご来場いただきました皆様にお礼申し上げますとともに、父、大澤壽人の作品がさらに多くの方々に理解されますことを心より祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

大澤 寿文
本庄 徳子



ごあいさつ

戦争が終わった翌年、1946年神戸女学院音楽科(現、音楽学部)に入学した私達は、和声学、対位法の授業の他、全学年合同の合唱を4年間大澤壽人先生に担当して頂きました。当時、西宮北口にありました西宮球場での野外コンサートに、先生が指揮なさるオーケストラ伴奏で、音楽学部学生全員が幾度かコーラスを歌いましたことも懐かしい思い出です。1948年には大澤先生指揮、大阪放送管弦楽団(NHK大阪)の伴奏で音楽学部学生全員と関西学院大学グリークラブにより、大阪朝日会館でヘンデル「メサイア」を歌い、若い情熱を燃やして練習に打ち込んだものでございました。

卒業後、生まれて初めてオーケストラで歌わせて頂きましたのも、大澤先生の指揮による朝日放送管弦楽団でした。「ホームソング」も何曲か初演させて頂き、録音後はプロデューサー、アナウンサー、ミクサーの方々とご一緒にご馳走になり、楽しい時を過ごさせて頂いたものでした。

長身でハンサムでいらした先生のご家庭には、お美しい奥様とヤンチャな坊ちゃま(壽文氏)、可愛いお嬢ちゃま(徳子様)、そしてとても立派なお父様がいらっしゃいました。先生は大へん子煩悩で、お宅へ伺いました時でも5歳くらいだった徳様をずっと抱いたままで私達とお話しになっておられました。

授業のはじめに、おねだりした私達に何時も5分間程、アメリカ留学時代、パリでのお話などをまるで大学生のような気分で楽しくお話して頂きましたが、根の真面目な方で、後はどんなにお願いしてもきっちり授業をされ、映画音楽の作曲、演奏、と多忙でいらした筈ですが、滅多に休講はありませんでした。几帳面なご性格で、外出から戻られるとご自分の洋服にブラシをかけて収納されるとのことでした。

戦争のため、先生は欧米でのご活躍が無理になって日本へご帰国なさいました。おかげで私達は先生に師事することが出来たのですが、先生の音楽活動に大きな妨げとなりましたことは、大層残念でございます。

しかし、再び大きな評価を得ました現在、ご子息壽文氏のご厚意により、ご遺作、ご遺品のすべてを神戸女学院にご寄贈頂きました。私達は心から感謝して、この大切な宝物を保管してゆかなくてはならないと存じております。

岡田 晴美

神戸女学院大学名誉教授
クラブファンタジー会長

大澤 壽人先生略歴

1906年8月1日兵庫県神戸市に生まれる。父、壽太郎氏は神戸製鋼所創設に関わった実業家。関西学院高等商業学部卒業後1930年に渡米。ボストン大学音楽学部、続いてニューイングランド音楽院で学び、フレデリック・コンヴァースに師事する。交響曲・協奏曲・室内楽曲など数多くの演奏会用作品を作曲し、大学卒業時の1933年6月にはボストン交響楽団(ポップス)を率いて自作《小交響曲》を披露した。同楽団を指揮した初の日本人である。

1934年パリに渡り、ポール・デュカとナディア・ブーランジェに師事。翌年にはコンセール・パドゥルー管弦楽団を自ら指揮して《交響曲第二番》・《ピアノ協奏曲第二番》・歌曲《さくらの声》を発表する。前衛的な作風と緻密な指揮で大成功をおさめるなど、その華麗な経歴は当時の日本人としては稀であった。

1936年に帰国した後は神戸女学院の教壇に立つ。並行してラジオ用放送音楽、舞台をはじめとする付随音楽、映画音楽、ジャズ風の協奏曲から校歌に至るまで、幅広いジャンルにおいて多彩な作品を創作した。作曲家・編曲家・指揮者、そしてラジオプロデューサーの役割まで担いながら実力派として活躍。800曲以上を遺し、1953年10月28日に47歳で急逝した。

2003年の代表作CDリリース以降、戦前・戦後の日本洋楽史における重要な作曲家兼指揮者として、その再評価が急速に進んでいる。



留学の頃



パリ時代



戦後、家族と一緒に

神戸女学院所蔵資料 「大澤壽人遺作コレクション」

「大澤壽人遺作コレクション」は、大澤壽人先生が遺された膨大な資料群です。長らく大澤家に保管された後、2006年8月にご子息大澤壽文氏より神戸女学院に寄贈され、「大澤壽人遺作コレクション」と命名されました。

コレクションは段ボール約43箱分にも及び、自筆譜やパート譜、演奏会プログラム・ポスター、演奏会評などの切り抜き、創作ノート、作品表、書簡、写真、録音テープ（自作自演を含む）、愛用の指揮棒など、先生に関する全ての資料が含まれます。

殊に、楽譜はラック3台に積み上げられ、自筆譜だけでも約1万枚、関連譜を含むと2万枚を優に超える圧倒的な量です。これらすべての楽譜は大澤資料プロジェクトによって調査され、『煌きの軌跡—大澤壽人作品資料目録—』に詳細なデータが記されました。

コレクションの全容は、数年内の刊行を目指して編纂中の『大澤壽人全資料目録』で明らかになります。この目録には、個々の作品に関する全ての情報が網羅的に掲載される予定で、現在は作品表・創作ノート・プログラム・書簡・録音記録・写真アルバムを照合する作業が進行中です。この作業によって、各作品の創作年・初演日時・演奏者が特定され、音源や演奏会写真の有無が確認されます。目録は演奏者・研究者・愛好家のために、使いやすく、総合的な手引きになることでしょう。



1949(昭和24)年11月 神戸女学院講堂にて

大澤資料プロジェクトは資料の電子化を行っています。楽譜は閲覧が可能になり、楽譜のコピーも入手できます。詳細は神戸女学院史料室(TEL: 0798-51-8503)、osawa_project@yahoo.co.jpまでお問い合わせ下さい。

Program

プログラム

I部：40歳代

《ABC朝日放送ホームソング集》より（1952-53年）

ララー日が健やかに	永田 桂(Sop)
猫の子あげますいらっしゃい	永田 桂(Sop)
幾山河をへだてても	山田 愛子(Mz)
雨の日のスケッチ	山田 愛子(Mz)
星と歩いて	永田 桂(Sop)
薔薇の花かげ	山田 愛子(Mz)
朝の九時過ぎ	永田 桂(Sop)・山田 愛子(Mz) 蜷川 千佳(Pf伴奏)

神戸女学院創立七十五周年記念の歌(1950年)

祈り 神戸女学院創立七十五周年記念歌(1950年)

日本の女性^{にょしよう}(1947年)

プティ・タ・プティ(Chor)・金月 里紗(Pf伴奏)

休憩10分



Ⅱ部：30～20歳代

てまりうたロンド(1943年)

ていちろう
丁丑春三題(1937年)

田中 聖子(Pf)

Une voix à SAKURA pour soprano et orchestre, Arrangement pour piano(1935年)

さくらの声 ピアノ伴奏版

清水 裕子(Sop)・田中 聖子(Pf伴奏)

A Phantasy of Heaven for Soprano, Flute and Pianoforte(1933年)日本初演

空の幻想

清水 裕子(Sop)・田中 裕絵(Fl)・田中 聖子(Pf)

休憩15分

Ⅲ部：原点

Concerto for Pianoforte and Orchestra, Arrangement for Two Pianos(1933年)日本初演

ピアノ協奏曲第一番 イ短調 二台のピアノ用編曲

(第1・2楽章) 第1ピアノ 増永 智子・第2ピアノ 松川 峰子

(第3楽章) 第1ピアノ 松川 峰子・第2ピアノ 増永 智子



Profile

出演者プロフィール



永田 桂 ながた かつら

ソプラノ

神戸女学院大学音楽学部卒業。朝日推薦演奏会、《こうもり》アデーレ、《メリー・ウィドウ》ヴァランシェンス、《カルメン》ミカエラを歌い、モーツァルト室内管弦楽団、関西フィルハーモニーと協演。第25回香川音楽コンクール日本歌曲部門第2位受賞。森池日佐子、岡田晴美の各氏に師事。日本演奏連盟会員。



山田 愛子 やまだ あいこ

メゾ・ソプラノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。第12回松方ホール音楽賞受賞、第58回全日本学生音楽コンクール大阪大会大学一般の部第3位、第16回宝塚ベガ音楽コンクール声楽部門第6位などを受賞。オペラ、宗教曲ソリスト、各種演奏会に出演。斉藤言子氏に師事。関西二期会会員、神戸市混声合唱団団員。



PETIT A PETIT プティ・タ・プティ 女声アンサンブル

1989年1月結成。神戸女学院大学音楽学部卒業生から成る(青島順子、久泉寛美、黒江薫、宮脇伸子、永松久美子、塩見玲子、末廣孝子、渡沼雅子)。レパートリーは合唱曲にとどまらず、宗教曲、オペラ、ポピュラー、ミュージカルと多岐にわたる。新作初演を中心に広く活躍中。09年6月二十周年記念コンサート開催。



田中 聖子 たなか せいこ

ピアノ

神戸女学院大学音楽学部卒業。同大学オータムコンサート、同大学新人演奏会、その他多数のコンサートに出演。07年いずみホールにて母娘で2台のピアノの為にコンチェルトをテレマン室内管弦楽団と協演。ソロの他、伴奏活動も続けている。これまでに田中淑子、保崎爽子、田中真理、中村美生子、奥村智美の各氏に師事。



清水 裕子 しみず ゆうこ

ソプラノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。同大学新人演奏会出演。第2回エルビス声楽コンクール第3位、第14回全日本ソリストコンテスト、第7回日本演奏家コンクール奨励賞受賞。08年3月大澤壽人《さくらの声》初演。OSM専門学校非常勤講師、日本音楽学会会員、関西二期会準会員、若本明志氏に師事。



田中 裕絵 たなか ひろえ

フルート

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。同大学新人演奏会、修士課程修了披露演奏会等出演。同大学の推薦により08年アメリカ演奏旅行にソロ奏者として参加し好評を博す。第12回KOBEL国際学生音楽コンクール奨励賞受賞。庄田奏美、西田直孝の各氏に師事。ソロ、室内楽メンバーとして活躍。



増永 智子 ますなが ともこ

ピアノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、京都市立芸術大学大学院音楽研究科修了。ソロ以外でも活躍し、第18回吹田音楽コンクールピアノデュオ部門第3位、第7回全日本ピアノデュオコンクール優秀賞受賞。09年4月デュオリサイタルにて、大澤壽人《青いセレナーデ》初演。松本裕子、芝令子、中野慶理、神谷郁代、池田洋子の各氏に師事。



松川 峰子 まつかわ みねこ

ピアノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。ハンナ・ギュリック・スエヒロ記念賞(大学院)受賞。第6回安川加壽子記念コンクール入選。第24回摂津音楽祭奨励賞受賞。韓国芸術総合学校招待演奏会、日本ショパン協会推薦演奏会などに出演。宮澤晶子、山岡真弓、N. ユジャン、池田洋子の各氏に師事。



蜷川 千佳 にながわ ちか

ピアノ伴奏

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。ポーランド国立クラクフ室内管弦楽団と共演。NHK名曲リサイタル伴奏出演。四條畷学園、OSM専門学校非常勤講師、関西二期会ピアニスト。山上明美氏に師事。



金月 里紗 きんげつ りさ

ピアノ伴奏

神戸女学院大学音楽学部卒業。同大学新人演奏会等に出演。在学中、作曲セカンドメジャー試験に合格、修了。ピアノをボリス・ベクテレフ、竹村久美子、作曲を石黒晶の各氏に師事。プティ・タ・プティ専属伴奏者。



高野 雅子 たかの まさこ

ロビー展示

神戸女学院大学音楽学部作曲専攻を経て、ビジュアルアーツ専門学校音響芸術学科卒業。同大学新人演奏会に出演。ピアノを松岡美佐緒、佐々由佳里の各氏に、作曲を澤内崇氏に師事。現在、DTMを中心に作曲・編曲活動中。



生島 美紀子 いくしま みきこ

ロビー展示

神戸女学院大学音楽学部作曲専攻、米スタンフォード大学大学院博士前期課程(音楽学)を経て、大阪大学大学院博士後期課程修了(美学)、博士号取得。『煌きの軌跡—大澤壽人作品資料目録—』編集代表。著書『音楽のリパーカッションを求めて—アルチュール・オネゲル《交響曲第三番 典札風》創作—』。神戸女学院大学音楽学部非常勤講師。



「煌きの軌跡、確かなる原点」 生島 美紀子

本日のプログラムは、大澤壽人の作品を創作時期ごとにご紹介します。親しみやすい晩年のホームソングからボストン大学卒業作品に向かって、時系列をさかのぼります。40歳代～30歳代～20歳代の順でお楽しみ下さい。

第 I 部：40 歳代

晩年：ラジオの寵児

《朝日放送 ホームソング集》より

1952-53 (昭和27-28) 年 / 46-47 歳

大澤壽人は生涯にわたって創作力にあふれており、ことに晩年は多忙を極めていた。神戸女学院の教壇に立つほかに、演奏会用作品の作曲・指揮から映画音楽、宝塚歌劇団や日本舞踊のための舞台音楽、校歌や社歌まで、創作活動はジャンルを越えて広がっていた。

中でも当時の最新メディアだったラジオ放送と大澤の活動は切り離せない。帰国翌年の1937年以来、JOBK (NHK 大阪放送局) で創作したラジオ・ドラマや朗読劇のための音楽は50作品を越え、担当していた音楽番組用の編曲作品も約400に及ぶ。

終戦から6年を経た1951年に、日本初期の民間放送として開局した朝日放送 (Asahi Broadcasting Corporation) とは、とりわけ関係が深い。大澤は専属の指揮者として、ABC交響楽団・ABCシンホネットオーケストラ・ABCラジオオーケストラ・ABC放送合唱団を率い、音楽面を一手に引き受けた。11月の開局当日にはアナウンスに続き朝日新聞ニュースが流れたが、このテーマ音楽も大澤の作曲であり、朝日放送はまさに彼の音楽と共に始動したといえる。

本日お聴きいただくホームソングも、そういった豊かな創作活動の一面を示している。音楽番組「ABCホームソング」は、「健全で家庭的であること」を目指して1952年9月にスタート、月曜から土曜までの毎日午前中に放送された。大澤は第1週に《母の愛》を発表し、以来《木の下ワルツ》まで49曲を書いた。シリーズは急逝のために中断したが、大澤のしゃれた歌によって先鞭をつけられた番組は復活し、数々のヒット作を生みながら1972年まで続く長寿番組となった。

大澤のホームソング作曲に歌詞を提供した詩人たちは28人。その中でも安西冬衛、竹中郁、喜志邦三とは以前から親交があり、安西の歌詞による歌は6曲、竹中は7曲、喜志は8曲と他の詩人たちと比べて多い。番組が始まった直後の10月には、3人全員の詩に基づいて、朗読・ソプラノ独唱・混声合唱・オーケストラによる大三部作《大佛千二百年祝典譜》を作曲している。

ホームソングはその名の通り、大澤の作品群のなかでも特に親しみやすい。調や拍子は平易で、音域も1オクターブをやや越える程度。口ずさみやすいように配慮されている一方で、調などの配置とリズム型の多彩さにはさすがと思わせる工夫の数々がみられ、歌シリーズの創作を楽しんでいた余裕が感じられる。

今宵は、大澤自身によるピアノ伴奏用編曲を用いて演奏するが、初演時は「独唱者+混声合唱」をオーケストラが伴奏し、自ら指揮して録音した。独唱には当時関西で活躍中の声楽家の他に、岡田晴美 (現在神戸女学院大学名誉教授) をはじめとする神戸女学院出身の教え子を起用するなど、番組を通して若手の育成に熱心であった点は、大澤の活動の中でも特記される事柄である。

それぞれの歌は2-3頁ほどの小品で、鉛筆書きの手稿譜を見ると筆致に淀みがなく、流れるような勢いがある。また、創作ノートから亡くなる直前の10月初旬の1週間を例にとれば、ホームソング2曲と校歌3曲を作曲、編曲・指揮のオーケストラ番組を2週間分収録、加えて東京で映画の仕事をしており、作曲のペースが非常に速く、膨大な量の仕事をこなしていたことがうかがわれる。

発想力にあふれ、それを実現化する高度な作曲技法を身につけ、一挙に完成形に至るという意味で真の作曲家であり、音楽の職人であったのだろう。だが、その才能ゆえに可能であった圧倒的な創作量が、過労を招く結果にもなったのだろう。当時も今も、大澤の早世を惜しむ声は多い。

《ララー日が健やかに》

歌詞：安西冬衛

安西冬衛 (あんざい・ふゆえ、1898-1965) は奈良県出身。大連に渡って詩の創作活動を続けた。安西は大澤と放送作品《鉄と火の協奏曲》(1942年) や、大阪府立阿倍野高校校歌を共作している。

あさはしんぶんはいたつの あしおとただしくやつてくる
ミルクいろのあさぎりに ぬれるあさです よあけです
ラジオのうたにトーストの やけるにほひもかうばしく
ララいちにちがすこやかに ララいちにちはあけてゆく

《猫の子あげますいらっしやい》

歌詞：竹中郁

竹中郁 (たけなか・いく、1904-82) は神戸市出身。竹中と画家の小磯良平は神戸二中の同級生で、生涯にわたる良き友人であった。大澤はわかっているだけでも73曲の団体歌を遺しているが、そのうち竹中の歌詞は芦屋市立岩岡小学校をはじめとする関西一円の校歌9曲や、鐘紡労連の歌など社歌6曲がある。

その他、神戸文化会館建立促進のポピュラー・カンタータ《あたらしき五月頌-みどりの祭典-》(1950年) に加えて、放送作品《鯨の背中》(1939年)、《鯉のぼり》(1941年)、《つばめ通信》(1943年) や戦時の演奏会用大作《つばめに託して母の歌える》(1940年) を共作するなど、

竹中は大澤の創作上重要なパートナーの一人であった。また《つばめ通信》には構成者として小磯の名が記されているように、関西在住の芸術家の間には相互の交流があり、実り多い豊かな文化圏が広がっていたと思われる。《猫の子あげますいらっしやい》は1952年11月録音、初演独唱は小松周子。

猫の子あげます いらっしやい 子猫八足 ひげもある
きんぎん きん茶 みどりの目玉 光ります
紙ぶくろはいや 風呂しきはいやよ バasketもつていらっしやい

《幾山河をへだてても》

歌詞:喜志邦三

喜志邦三(きし・くにぞう、1898-1983)は大阪府出身。「ラララ、紅い花東車に積んで」に始まるラジオ歌謡《春の歌》で知られる詩人で、神戸女学院教授。職場の同僚である大澤と喜志は、報徳学園応援歌を含む6曲の校歌の他、放送作品《夢殿観音》(1940年)、《五月人形》(1942年)、《水力発電所》(1943年)などを共作した。《幾山河をへだてても》は1952年11月録音、初演独唱は松本寛子。

幾山河をへだてても 忘れぬ町よふるさとよ
堀割添ひに酒倉の 白壁ならぶ思ひ出の
あの故里へ、 ああ 帰りたいや

《雨の日のスケッチ》

歌詞:喜志邦三

河のほとりの公園の 芝生に――雨、雨、雨がふる
青い蛙がぴよんと跳ねて 気取つて見ている眼鏡橋
雨、雨、雨、雨 雨がふる

《星と歩いて》

歌詞:大竹安喜

大竹安喜については現在調査中で、大澤との共作はこのホームソング1曲のみである。《星と歩いて》は1953年6月録音、初演独唱は岡田晴美。

夕べにさまよう
街角――にみる ひとつ星
またたく瞳が やさしく――ささやく うれしき

あおぐ空
くちずさむ 思ひ出の セレナーデ
そぞろに歩いた
ひとつの眼差し わが胸に

《薔薇の花かげ》

歌詞:牧昇治、校訂:安西冬衛

牧昇治については現在調査中で、大澤との共作はこのホームソング1曲のみである。

いりひ
入陽の丘にゆれている ピンクの花ばら夢のはな
あしたはどんな……

どんないいこと あるかしら 乙女のささやき ばらのかけ

二重唱《朝の九時過ぎ》

歌詞:喜志邦三

《朝の九時過ぎ》は1953(昭和28)年4月録音、初演二重唱は岡田晴美と声楽出身で朝日放送音楽プロデューサーを務めた岩尾良治。

「ベルが鳴つてる、勝手口」
「ハイハイ、^{どなた}何誰でございます」
「電気屋です、集金です 先月分の電気代です」
(ジリジリジリリン、ジリジリジリリン)
「あら、また、ベルが鳴っている」

戦後:神戸女学院の教壇

女声合唱曲

《神戸女学院創立七十五周年記念の歌》

《祈り》1950(昭和25)年／44歳

《日本の女性》1947(昭和22)年／41歳

大澤が教え子を育てた唯一の学校、それが神戸女学院である。学院資料によれば、1939-41年に神戸女学院専門学校音楽学部講師、学校制度の変化した1948年に教授就任となっている。が、岡田晴美名誉教授が当時の音楽学部の同窓生達に「大澤先生の授業を受けた経験」を広く尋ねた結果、1937年以来1953年に亡くなるまで、途切れることなく教鞭をとっていたことが判明した。

帰国に際しては東京の学校からも招聘があったが、大澤が神戸女学院を選んだという。また、ご息子が遺品資料

の寄贈先に考えられた理由も「父が女学院を愛していたから」であり、大澤家と神戸女学院の縁は誠に深いものがある。

新進教師となったのは帰国翌年で、この年は4月に東京、12月に大阪で演奏会を開き、留学期と変わらぬ勢いで次々と大作を発表している。特に4月の演奏会は神戸女学院同窓会東京支部の主催で、《ヴァイオリン小協奏曲 支那詩》と《交響曲第三番 建国交響曲》の初演が同時に行われ、後述するピアニスト、ジル＝マルシェックスが友情出演するという豪華な一夜であった。

さて、神戸女学院は1950年に創立75周年を迎えている。10月には記念礼拝から始まる一連の関連行事が開催され、戦後の明るい雰囲気の中で盛大な祝事が続いた。記念歌の制作にあたっては学生達が詩を書き、大澤は応募作品の中から矢野多美子の詩を選び、讃美歌スタイルで《神戸女学院創立七十五周年記念の歌》を作曲した。また音楽主事を務めていた藤田ときの詩によっても、無伴奏女声三部合唱曲《祈り》を作曲し、音楽学科記念演奏会で披露している。

《神戸女学院創立七十五周年記念の歌》

あゝ七十^{ななそ}まり五^{いつ}とせの
めでたき今日の^{いっ}学び舎よ
天なる國を地になせし
神のみさかえ仰ぐなり

《祈り》

幽玄の昔より 神の御手により 岡田山
若き命の流れも清く 高き理想に 行く道を一筋に
學ぶ我が学園の 齢を祝うこのときに
讃えて祈る歌声を 聞こし召しませ おお神よ

この頃大澤は、「シルバertime」というNHK大阪放送局発全国放送のラジオ番組をレギュラーで受け持っていた。企画・編曲・指揮すべてを担当し、ボストン留学時代に知ったガーシュインからバリ時代に会ったルーセルまで、新しい音楽をわかりやすく紹介した。

当時の番組表を調べてみると、こうした音楽番組の多さと共に、女性を対象にした番組の多さが目につく。「勤労婦人の時間」「若い女性」などのタイトルから、敗戦からの復興を目指す社会の活気や、それに伴う女性進出の勢いが伝わってくる。

ピアノ伴奏付き女声三部合唱曲《日本の女性^{にょしやう}》は1947年に、神戸女学院音楽学部第17回定期演奏会のために作曲され、神戸女学院講堂で初演された。詩は土井晩翠（どいばんすい、1871-1952）が1906年に刊行した第三詩集『東海遊子吟』に収録の「日本の女性」である。

この時期は音楽学部の教壇に立って10年になり、また私生活では1940年に結婚して末っ子の女兒を大変可愛がっていたという頃である。学校で接する若い女学生達に、そして愛しい末娘に、新しい時代を託す想いで、晩翠の詩を読んだのではないだろうか。

操は嚴冬雪ふるなかに 嗚呼君、見えざる無上のいさを
ほゑむ寒梅にほひやたぐふ、嗚呼君、聞えぬ至高のほまれ
ほまれば千尋^{せんじん}暗なる谷に 嗚呼君、知れざる^{くまやう}究竟の操、
潜める幽蘭かほりに似るか、大なる國民、君よりおこる
いさは蒼溟波捲く淵に 涙になさけに操に愛に
輝く白玉光といづれ。 嗚呼君、やさしき女性の力。

第Ⅱ部： 30歳代～20歳代

【戦中：戦争と対極にある平明

《てまりうたロンド》1943（昭和18）年／36歳

大澤が1936年に帰国してからの日本は、日中戦争から太平洋戦争へと続く戦時の道にあった。放送作品《渡洋爆撃隊》（1940年）や《帝国海軍讃歌》（1943年）などにその反映がみられる。他方、宝塚歌劇団のための《子供風土記》（1941年）や《子供詩集》（1942年）などには、熾烈な社会の対極点としての安寧や懐かしさを願う作曲家の心情が感じられる。ピアノ独奏曲《てまりうたロンド》もそうした戦禍激しき日々にかかれた平明な作品で、同じピアノ作品のジャンルでも、留学時代に書かれた前衛的な趣の小品集とは全く作風が異なる。

1943年1月に放送された作品は、タイトルの通り、小ロンド形式A-B-A-C-Aで書かれている。Aのロンド部分では、毬が跳ねるような軽やかな連打の合間からわらべ歌が聞こえてくる。Bでは律の調べがやわからかに奏され、Cでは懐かしげな旋律が登場する。

以上のように説明すると、日本的な雰囲気で終始する楽曲の様だがそうではない。各部分の中心音を見ると、Aの「レ」にB「ラ」とC「ソ」が続き、西洋の伝統的な調関係を模している。この大枠の中で、日本と西洋の響きが交差している。前者はわらべ歌・律旋法や都節による旋律など、後者は半音階・全音階・教会旋法・累積和音・白鍵と黒鍵の対比的和音など、これらが混然一体となって用いられている。そして、本来が管弦楽大作を得意とする作曲家らしく、題名の可愛らしさとはかけ離れて、鍵盤の最低音域から最高

音域まで鳴らす大胆さも見られる。

このように、西洋と巧みにブレンドされた大澤の内なる「日本的アイデンティティ」は、戦争が影を落とす日々の中で、聴衆に優しく最も分かり易い形で表現されている。

帰国後：名ピアニスト ジルマルシェックスとの親交

ていちゅうはるさんだい
《丁丑春三題》

1937(昭和12)年／30歳

帰国直後の大澤は、休む間もなく1936年5月に東京、6月に大阪で帰朝演奏会を開催した。翌1937年も同様に4月に東京、12月に大阪と演奏会を続け、大作を次々と発表している。

その頃来日したピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックス(M. Henri Gil-Malchex, 1894-1970)はパリ在住で、モーリス・ラヴェルやフランス六人組の作曲家達、そして画家達とも広く交友のあった華やかな経歴の持ち主であった。彼をモデルにした素描を画家アンリ・マティスが1924年に描き、作品は現在東京の国立西洋美術館に収蔵されている。

薩摩治郎八の招聘によって初来日した1925年には、演奏会プログラム表紙に上記の素描が用いられ、この来日はドイツ音楽に偏っていた日本にフランス音楽のエスプリを紹介したとして、大きな話題となった。その後1931年の2回を経て、1937年が4度目の来日だった。

このジル＝マルシェックスこそが、1935年11月の大澤のパリ・デビューに尽力し、また《ピアノ協奏曲第二番 ト短調》を初演した人物である。

公演成功の後に帰国した大澤とジル＝マルシェックスの親交は、日本でも紹介されている。1936年5月の演奏会については「第二ピアノ協奏曲は大澤氏会心の作で昨秋十一月巴里ガボウ楽堂での初演にはジェルマノシエック(嘗つて日本に来朝した)が独奏し絶賛を博した作品である」とする新聞記事が見られ、また1937年4月の演奏会では「ジル＝マルシェックスが友情出演してプログラムにないドビュシー3曲を弾いた」旨が報道されている。

友情出演の後、5月以降にジル＝マルシェックスが東京でピアノ独奏会を何回か開いたことは、複数の資料に記されている。一方、ピアノ独奏曲《丁丑春三題》^{ていちゅうはるさんだい}に関しては、大澤が作品表に「日本初演ジルマルシェックス」と記している。これらを併せると、彼が4度目の来日の折に、「親愛なるヒサト」のために《丁丑春三題》を初演したことは間違いのないと思われる。

「丁丑」^{ていちゅう}は「^{じっかん}十の丁と^{ひのと}十二支の^{じゅうにし}丑を意味し、作曲の1937年が「丁丑」にあたる。3楽章はそれぞれ「春宵紅梅」「Impromptu désœuvré(無為即興)」「春律酔心」の副題を持つ。大澤はボストン留学期には抽象的な楽想による前衛的なピアノ小品も多く書いたが、《丁丑春三題》は帰

国後に書かれた作品だけに、日本の音階が随所に現れ、春を表わす独特の世界を形成している。

I.「春宵紅梅」では、空5度を含む右手の旋律が終始繰り返されて、F#を中心音とする。一方左手も遅れて旋律を奏で始めるが、その開始音G#が低音部で構造を支える役割へと変化していく。

II.「Impromptu désœuvré(無為即興)」自由に落下していく右手の旋律に始まり、その輪郭となる音高は増三和音を形成している。この響きは随所で現われて、基の全音音階を感じさせ、春の気分を茫漠と表している。楽想は異なるが、「右手の旋律中心音はF#、左手の構造音はA b」という方法は前楽章と全く同じである。

III.「春律酔心」左手で繰り返すA bを構造音にして、全体を統一している。速い動きの中から機嫌のよい都節の旋律が聞こえ、また2種の日本の音階を複調のように重ねて不協和を生むなど、内なる音感を西洋の手法によって表わし、留学の成果はここに見事に日本風に置き換えられている。

フランスでの活動： パリ公演の歴史的成功

《Une voix à SAKURA さくらの声》

1935(昭和10)年／29歳

1934年9月、ボストンでの充実した4年間を終えた大澤は、ボストン大学やニューイングランド音楽院、ボストン日本協会の激励を受けてパリに出帆した。それから約1ヶ月英国に滞在し、10月14日にパリに到着した。

パリに渡ったのは、ポール・デュカ(Paul Dukas, 1865-1935)とナディア・ブーランジェ(Nadia Boulanger, 1887-1979)に師事するためである。デュカは書法の厳格な大家として知られ、またブーランジェは名教師の誉れが高く、世界中から門下生が集まっていたという。後者のレッスン場では女流作曲家、外山道子(とやまみちこ, 1913-2006)に会い、以後外山は堪能な仏語を生かして、大澤の音楽活動に尽力する重要な協力者となった。既述のピアニスト、ジル＝マルシェックスの所へも外山に紹介されて行っている。

さて大澤は二人のレッスンを受ける傍ら、1935年1月に《交響曲第二番》、3月頃に《ピアノ協奏曲第二番》を完成した。そして11月8日にサル・ガヴォーで演奏会を開催する。名門コンセール・パドゥルー管弦楽団を率い、大澤はすべてを指揮して好評を得た。

すべてと言うのは、当日のプログラムが自作だけではないからである。ベルリオーズ《リア王序曲》、ドビュシー《放蕩息子》、ラヴェル《亡き王女のためのパヴァーヌ》、《古風なメヌエット》など、パリを舞台に活躍した作曲家達の名が並び、これらを指揮した作品への理解と解釈が評価された。つまり大澤はこのパリ・デビューによって、自作自演した作曲

家としてだけでなく、フランス作品を振る指揮者としても当時の世界楽壇に名乗りを上げたことになる。

加えて当日は、20世紀前半の音楽史を彩る音楽家達が大勢来場していた。フランス六人組のオネゲル、ミヨーに加えて、イベール、ケクラン、パリ音楽院作曲科主任教授ピュッセル、ロシアからのパリ楽派グレチャノフ、日本の作曲家達を指導していたチェレブニン——まさにきら星のようなメンバーである。

後日の演奏会評でイベールは、大澤を「瑞々しく感性の優れた天賦の才能」と述べ、またブリアンという評論家は「夜明け」と題して、「この日本人はもちろん、あの外国人画家達が当然の如くパリ派に加わったように、ヨーロッパ音楽を書いている」と述べている。

イベールの称賛や、大澤を音楽のパリ楽派と認めるブリアン評は、戦前の日本洋楽史において特別の輝きを放つ。殊に後者はそうである。なぜなら、チェレブニンは自らの名を冠した賞を日本人作曲家に対して設け、時を同じくしてパリで譜面審査を行っていた。大澤も日本にずっといたなら応募しただろうと思われる賞である。その賞の結果発表以前に、ブリアンは大澤の音楽を聴いて、「外国人作曲家として既に、審査員チェレブニンのレベルだ」と評しているのである。日本に帰れば当然遥かに抜き出ている。パリ公演が勝ち得たのはこの様な高評だった。大澤は世界楽壇の中心地で、当時の日本人音楽家には稀な、輝かしい経歴を築いたのである。

そしてその夜、《交響曲第二番》・《ピアノ協奏曲第二番》と共に初演されたのが、オーケストラ伴奏による歌曲《Une voix à SAKURA さくらの声》であった。

この作品は9月に完成し、ソプラノ、又はテノールのために書かれている。初演はロシアのソプラノ歌手、マリア・クレンコ (Maria Kurenko) が務めた。歌詞はおそらく大澤自身によるもので、私達に馴染みの《さくら》が独自に引用されている。

大澤にとって《さくら》は思い入れが深いようである。ボストンで編曲し、外国生活を終えるパリで《さくらの声》を作曲し、終戦翌年にはピアノ協奏曲の形態で《さくら幻想曲》を書いている。節目のときにこの題材を用いるという意味で、「日本」を象徴する特別な存在であったのだろう。

また大澤の歌曲が少ない点からも、《さくらの声》は今後歌い継がれていくべき代表作と考えられる。以下の歌詞は日本語で記すが、大澤はクレンコのためにローマ字で記している。本日は、作曲者自身によるピアノ伴奏版を用いて演奏する。

ああ、ふるさとの春の想いは

さくらさくらと歌うころ

弥生の空は 見渡すかぎり 霞か雲か 匂いぞ出ずる

(ハミング)、花に慕うとも いにしえのままに歌い

いざやいざや 見にゆかん

アメリカへの留学: ボストンで花開く才能

《A Phantasy of Heaven 空の幻想》

1933(昭和8)年/26歳

1930年春に関西学院高等商業学部を卒業、大澤はボストンを目指して日本郵船あさ丸に乗り込み、9月15日に到着した。ボストン大学音楽学部、続いてニューイングランド音楽院に籍をおいて作曲の勉強を始め、4年後には更にパリに渡っている。24歳から28歳は大澤の才能が一挙に花咲き、驚異的な成長を遂げた時期であった。

さて、大学卒業を半年後に控えた1932年12月から翌年3月にかけて、大澤は“人生で想像できないほどの作品”を作曲したと神戸の両親に書き送っている。実際その創作力は驚くばかりで、6月12日の卒業式の晩にボストン・ポップス・オーケストラを自ら指揮して披露する《小交響曲 二長調》や、《ピアノ五重奏曲 ハ短調》《ピアノ協奏曲第一番 イ短調》をはじめとする力感あふれる作品が並び、この4カ月間だけで楽譜枚数にして250を越える量を書き上げている。

今宵、日本初演の英詩による歌曲《A Phantasy of Heaven》も、旺盛な創作力に満ちたこの時期に作曲された。そして完成から1年余を経た1934年5月21日、ボストン日本協会主催による大澤作品演奏会で発表され、初演には当時ボストン大学の教師だったアルメディア (Sop)、マドセン (Fl)、ヘイヴンス (Pf) があたった。会には元駐日大使フォーヴズが列席し、この正式な演奏会が成功裡に終了した自信によって、世界の楽壇に通じる作曲家になりたいという大澤の厚望はより現実味を帯びてきた。

作品は「ソプラノ・フルート・ピアノのための」と記されている。ソプラノ独唱に添えられるフルート助奏とピアノ伴奏ではなく、三者が同等に扱われ、それぞれの演奏者に技巧が求められる。

歌詞はアメリカの詩人、ハリー・ケンブ (Harry Kemp, 1883-1960) による。世界各国を旅した“さすらいの詩人”として知られるケンブは、旅行以外のときは大澤が滞在していたマサチューセッツ州にも暮らしていた。「A Phantasy of Heaven」は1918年に、フィッツジェラルドのデビュー作を掲載して定評のあった文芸誌、『ザ・スマート・セット』に発表された。どのような経路で大澤がこの詩を知ったかは不明であるが、1920年代になって2つの『名詩選集』に収録されており、おそらくどちらかが目にとまったと思われる。

ケンブの詩は4節から成り、亡くなった幼い男の子が天国で戯れる様子を描写している。織天使 (天使の階級の第1

位)がうたた寝をしている間に、子供が他の天使達と楽しげに遊んでいる第1節、たわわに実った天国の葡萄があまりに美しく魅惑的なので、取って逃げてしまう第2節、葡萄の房が大きく重すぎて、子供達がつまづき倒れる第3節、そして眼の覚めた熾天使が気づいて彼らを神の所に連れていくが、神は怒らず自分もガリラヤで悪戯をしていたことを思い出して笑う第4節——このように、詩は子と天使が喚起する天国のファンタジーで、神の気高い本質を感じさせると共に、子を失くした親に慰めを与える。

大澤はこの詩を通作形式で作曲した。大作に意欲を燃やしていた頃である。子供達の愉悅や神の前での緊張と安堵など、様々な場面と情景に、オーケストラ楽器の音色に対する感覚が鋭く反映されている。なお作品の邦題は、大澤自身が作品表において《空の幻想》としている。

Perhaps, he plays with cherubs now,
Those little, golden boys of God,
Bending, with them, some silver bough,
The while a seraph, head a-nod,

(詩解釈は、米国サンマテオ大学キャスリン・T・モトヤマ講師による)

第Ⅲ部：創作の原点

Ⅰ ポストン大学音楽学部卒業作品

《Concerto for Pianoforte and Orchestra ピアノ協奏曲》1933(昭和8)年／26-27歳

大澤のポストン滞在は、1930年9月15日から1934年9月9日である。この間に著しい成長を遂げたことは既述したが、作曲の勉強は基礎レベルからのスタートであった。和声学や対位法や管弦楽法の学習と並行して実作を行い、現在遺されている作品で最も古い日付を持つのは、ヴァイオリンとピアノのための《憂鬱な即興曲》1930年11月である。

その後、1931年には《フーガ》や《人形のうた変奏曲》といった習作の趣の強いピアノ作品が続くが、1932年になると《ピアノ三重奏曲 二短調》と《チェロとピアノのためのソナタ 長調》が早くも完成している。殊に後者は当時まだ珍しい四分音を意欲的に使い、力感溢れる作品に仕上がっている。初めてのオーケストラ作品に取り組んだのもこの年で、交響組曲《浦島》は未完に終わったものの、楽譜枚数にして100頁以上を作曲した。

ポストン後半の1933-34年には、堰を切ったように作品が生み出される。1932年暮れから《小交響曲》、《富士山》、《ピ

ノ五重奏曲》、《ピアノ協奏曲》、《空の幻想》など大作を含む5作品を並行して書き始め、これらの他に《三つのプレリュード》、《ソナチネ》、《シンバル》なども書き、ポストン大学卒業直前の1933年5月には少なくとも350頁以上が完成した。

6月の卒業式の晩には、ポストン交響楽団のメンバーから成る、ポストン・ポップス・オーケストラを日本人として初めて指揮し、一段落して夏のドライブ旅行に出かけた。それから秋に《ピアノ協奏曲 第一番 イ短調 二台のピアノ用編曲》、《新英州》、《弦楽四重奏曲》で250頁以上を書き上げ、1933年の創作量は合計で500頁に迫る。

ポストン最後の1934年は《三つの田園楽章》、《六つのカプリチュエティ》、恩師ニューイングランド音楽院コンヴァース教授とポストン大学マイヤー講師に捧げられた《交響曲 第一番》、ポストン交響楽団指揮者ケーセヴィツキに捧げられた《コントラバス協奏曲》など約400頁で、他の小品も含めるとポストン時代後半の2年で900頁超という、驚くべき創作量を示している。(最低音域を受け持つコントラバスを独奏楽器にした協奏曲は当時も今も珍しく、現在神戸女学院に最も照会の多い作品の一つである)。

噴出することくに創作されたこれらの作品群が、才能に起因することは言うまでもないが、大澤の楽譜を詳細に検証していくと、この作曲家が西洋伝統の作曲技法を身につけようとして、また自分の「内なる日本」を表現しようとして、どれ程の時間と熱意を総譜研究に注いだかも十分に窺われるのである。

1930年代に集積されていた音楽語法の数々——半音階や全音音階、人工的な混成音階や伝統的な教会旋法、三全音、累積和音、特定の音程を核とする旋律形成法、隣接半音による不協和、調性の香りや無調の先鋭の響き、拍節感を欠く不確定なリズムなど——これらを形成していった西洋の感性と理性を大澤は徹底的に理解し、次に自らの内にある太鼓の音や笛の音、祭りの響きやざわめき、わらべ歌や民謡など、日本の情緒をいとも自然に取り出してきて、これらとの融合を深いレベルで試みている。

1933年5月に完成し、ポストン大学に卒業作品として提出された《ピアノ協奏曲》においても、その融合が試みられている。そして、戦前に作曲された日本最初期のピアノ協奏曲の一つでありながら、作品は融合の深さゆえに、既に独自の世界を築き上げている。

26歳の作曲家が書き上げた126頁の総譜は、9種類の打楽器を用い、演奏には30分強を要する。堂々たる風格の《ピアノ協奏曲 第一番》は、このように大きなスケールで、大澤の外なる西洋と内なる日本が融合する独創性ゆえに、創作の原点と見なされるのである。

本日は作曲家自身が10月に完成した《二台のピアノ用編曲》を日本初演する。1930年代の抽象的で不協和な響きが感じられる一方で、祭りのヴァイタリティにあふれ、民謡風の旋律も聞こえてくる。鳴りの良さ、リズムの活気、広音域のダイナミズム、ピアノの名人芸など、才気あふれる音楽が展開していく。

第1楽章：やや速く戯れるように〜ほどよく速く戯れるように
活気のある短い祭り囃子のような音型で開始され、このモ
ットー音型がソナタ形式のうちで終始変容していく大規模な
楽章である。モットーを第1主題と捉えると、第2・第3主題も
日本的で、殊に第2主題は第3楽章ロンド主題と密接に結び
ついて、楽曲全体の統一感を生んでいる。独奏ピアノの音
の厚さとリズムの細かさの対照が際立つ一方、その大胆さ
を演出する演奏技術の冴えが不可欠となる。

第2楽章：ややゆっくりと 優雅に

冒頭、ピアノ独奏によって三全音を組み合わせた抽象的な
動機が提示された後、民謡と律音階を混成した旋律が奏
される。祭り囃子の断片のような付点リズムも登場し、徐々に
華やかさを増していく。中間部は静かに始まるが、第1ピ
アノが両手のユニゾンで五音音階の上行を始め、2台の掛け
合いとなる。冒頭の動機が戻る再現部では、第1ピアノが細
かい音符やダイナミックな動きで広い音域を駆け巡る中、両
者に高度な技巧が要求される。

第3楽章：間奏曲と終曲

中庸の速さで 神秘的に〜きわめて速く 活気をもって
最弱音に始まる「間奏曲」は低音部要所でラとミが鳴り、イ
短調の構造を明らかにして「終曲」を導く。3拍子の軽快な
主題を持つ終曲は5つの部分に分かれ、間に5拍子と4拍
子の部分を挟んで、A-B-A-C-Aロンド形式の型をもつ。リ
ズムが息づく中、次々と楽想が繰り出され、エネルギッシュな楽
章を個性的な両手のグリッサンドが締めくくる。

参考文献：『朝日放送の50年 I 本史』、『神戸女学院百年史
総説』、小松耕輔『わが思い出の楽壇』、神吉恵美「ジル=マル
シェックスのピアノ演奏会」『薩摩治郎八と巴里の日本人画家
たち』、片山杜秀「伊福部昭」『日本作曲家選輯』。

※大澤壽人の姓と生年は、通説とは異なる事が調査で判明し
た。正しくは、「おおさわ」で、「1906年」生まれである。大澤が楽
譜にOZAWAと自署しているのは、外国で発音される場合をあら
かじめ想定したと思われる。今後は本来の読みである「Osawa」
を用いる。

「大澤壽人スペクタクルI」 編集／大澤資料プロジェクト デザイン／近藤 のぞみ

2010年3月大阪公演

〈フェニックス・エヴォリューション・シリーズ Vol.56〉



HISATO OSAWA

神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による

大澤壽人スペクタクルII

トランペット協奏曲 60年ぶりの関西蘇演(ピアノ伴奏版)
2010年3月3日(水) ザ・フェニックスホール

大阪市北区西天満4-15-10梅田新道交差点・東南角
ニッセイ同和損保フェニックスタワー内
開演／19:00(18:30開場) 入場料／3,000円(全席自由)

主催：大澤資料プロジェクト 共催：ザ・フェニックスホール 協賛：ニッセイ同和損保 後援：クラブファンタジー(神戸女学院大学音楽学部同窓会)

